

「成る」可能性のない国家

——井上ひさし『吉里吉里人』論

1、はじめに

井上ひさし『吉里吉里人』は、一九七三年六月から月刊誌『終末から』に佐々木マキのイラスト入りで連載が始まり、翌年十月、同誌廃刊にもなつて第五章の途中で中断された。その四年後、稿を改めて一九七八年五月から一九八〇年九月まで、各月に一章ずつ、二十八ヶ月にわたつて『小説新潮』に連載されて完結した。一九八一年八月に新潮社から単行本として刊行され、一九八五年九月、新潮文庫として上・中・下巻で文庫化された。作者・井上ひさし自身が「昭和三十六年でしたか、国際分業論というのが出てきて、日本は食糧を作らなくてもいい、工業で立ててというのがあった。東京オリンピック前で出稼ぎの悲劇が相次いでいた。僕は農村出身ですからね。農民が長い間、国に利用されてきたうらみもあって、ひどい論だと思った。そのころですね。吉里吉里人のアイデアがはっきり形になってきたのが」（読売文学賞のひ」と「読売新聞・一九八二年二月一日夕刊」と語るように、この作

牛 路 遥

品は、日本という国家に愛想を尽かした東北の一寒村の人々が自給自足の新国家をうち建てようとするところから始まる。小説家の古橋健二は編集者の佐藤久夫とともに、黄金に詳しい人物を取材するため急行列車『十和田3号』に乗車した。ところが、列車は公用語吉里吉里語、通貨単位「イエーン」を導入した自給自足の国家・吉里吉里国に入国する。吉里吉里国は日本政府に愛想を尽かし、食糧やエネルギーの自給自足で足元を固め、高度な医学や独自の金本位制、タックス・ヘイヴンといった切り札を世界各国にアピールして国家の独立を宣言する。しかし、「分離独立運動」の二日後、吉里吉里国は新任大統領の古橋が吉里吉里国の秘密を公にすることをきっかけに消滅する。

作品には「初代キリキリ善兵衛」として吉里吉里国を護り、死後も「地の霊」となつて「百姓たちの暮らしぶりを眺める」「記録係」が登場する。だが、作品の収束部で吉里吉里国が消滅したさい、この「記録係」は「ただのたましい」に戻り、これによつて何千人もの「キリキリ善兵衛」＝「地の霊」が生み出される。そこには、国家の誕生と消滅の過程を超越的な視点で眺める「地

の「霊」が問題化されている。本稿では、この「身体」を持たない「地の霊」を通して『吉里吉里人』を読み直す。具体的には、(一)主人公の作家・古橋の肩越しに世界を眺める「記録係」が、「古橋の見ていないものは語らない」という原則をもちつつ、ときに「忠実性」をもって物語を記述することから逸脱し、作品内世界に真逆な二つの事実が現前することの問題、(二)語られた言葉とそこに付されたルビ、標準語と方言といった言語の二重構造をめぐる問題、(三)吉里吉里国における「無駄」の堆積と「無駄」から生じる意味の問題、(四)吉里吉里国における「性」のありようと、それを越えたところで永遠に生き続ける「地の霊」をめぐる問題——を論じたいと考えている。

物語の構造について、前田愛は「吉里吉里人」論（「解釈と教材の研究」・一九八二年三月）で、「カーニバル的な世界の原理は、生と死、快楽と苦痛、摂食と排泄というように、対立するもの同士の役割が自在に交換される場所にある」、「国立病院で行われている動物の合成や臓器の移植は、いわばカーニバルの交換原理を、身体のレベルに置換し、固定する祭儀を意味しているのである」といい、小説における「カーニバルの世界」に注目する。今村忠純は「井上ひさし氏への手紙」（「基督教文化研究所研究年報」・一九八二年六月）で、「この小説は現代日本社会にたいする痛烈なパロディになっていると同時に、フリーエのユートピアのパロディにもなっている。いわばこの小説はパロディの二重構造になっているのではないか」と「現代日本社会」と「フリーエのユートピア」という「パロディの二重構造」を提示する。

分離独立運動について、山田有策は「井上ひさし吉里吉里人

〈国家〉生成・消滅譚」（「解釈と教材の研究」・一九八八年三月）で、「吉里吉里国は底部に消滅への暗い流れを潜ませているようだが、それらをほとんど感じさせないのが、好色立国の大らかな哄笑に他あるまい。この好色性がある限り吉里吉里国はいつか再び生成するに違いない。そう読者に想わせるほど全篇にわたって性の哄笑は鳴りひびいているのである」と国家の消滅が予言されていることを述べた上で、その再生の源である「性の哄笑」を提示する。高田知波は「国家・国民・命がけの「ゲーム」——井上ひさし『吉里吉里人』をめぐる——」（『日本文学』・一九九五年一月）で、「日本国憲法が保障しているはずの国家と国民、権力と権利との「ゲーム」をイメージ化したその上で、理想的な小国家を大日本と列強諸国が力づくで滅亡させるという「ユートピアの生成と消滅」物語の枠組みを超えて、吉里吉里国内にもまた権力のパラドックスが存在していたことを明らかにしているところこそ、この小説の最大の価値があるのではないかと私は思う」と吉里吉里国内における「権力のパラドックス」を提示する。

語り部について、蓮實重彦は『小説から遠く離れて』（日本文芸社・一九八九年四月）で、「『吉里吉里人』の途方もない長さは、予期せぬ飛躍や思いもかけぬ逸脱によるものではなく、その長さがある程度正当化しているかにも見える列挙や網羅や引用にしても、ほとんどの場合、類似性の秩序への律義さ故に隙間を埋めずにはいられぬ話者の臆病さに由来するものだ」と語り手の「臆病さ」が小説全体の冗長さにつながっていると指摘する。赤坂憲雄は「井上ひさし、または吉里吉里国のゆくえ②」（『環…歴史・環

境・文明」・二〇二二年秋)で、「作者としての井上ひさし／記録係／主人公としての小説家・古橋健二という、三層をなすよじれた関係が見いだされることになる。しかも、古橋健二が井上ひさしの戯画化されたゆるい分身であるとすれば、この作家／わたし／主人公は循環する三位一体の関係にあるとも言えるのかもしれない」と「三位一位」の語りの構造を提示した。菅野昭正は「ことはの魔術師 井上ひさし」(岩波書店・二〇一三年四月)で、「霊となつて村の一揆や反乱の歴史をずつと眺め、今度も運動の全貌を高めから見わたしていたこの存在によって、吉里吉里の昔と今、土俗と現代とが繋ぎあわされて、小説がいつそう厚みを増す結果になつている」と「キリキリ善兵衛」が吉里吉里の「昔と今」、「土俗と現代」を繋ぎ合わせる鍵であると指摘する。

これまでの先行研究では、法律や権力、言語など様々な視点から国家生成の手段や国家消滅の原因など考察されてきた。以上を踏まえて、本稿では以下の点を提示したい——吉里吉里人にとつて〈国家〉とは何か。作品には「初代キリキリ善兵衛」として吉里吉里国を護り、死後も「地の霊」となつて「百姓たちの暮らしぶりを眺め」る「記録係」が登場する。だが、作品の収束部で吉里吉里国が消滅した際、この「記録係」は「ただのたましい」に戻り、何千人もの「キリキリ善兵衛」＝「地の霊」が生み出される。そこには、国家の誕生と消滅の過程を超越的な視点で眺める「地の霊」が問題化されている。本稿では、従来の研究を踏まえ、この「身体」を持たない「地の霊」を通して「吉里吉里人」を読み直し、吉里吉里国の消滅が何を意味しているのか、そして、「分離独立運動」が繰り返される中で〈国家〉がいかに捉えられてい

るのか、という問題を明らかにする。

本稿は『吉里吉里人』(新潮社・一九八一年八月)をテキストとするが、初出と初収を比較したところ、異同は数多くあり、その中でも大幅に変更が生じた箇所を以下のようにまとめた。

①、時間、数字の変化

【初出】この男は古橋健二という小説家である。年齢は四十六歳、

【初収】この男は古橋健二という小説家である。年齢は五十二歳、(二〇頁)

②、言語の変化

【初出】(アカヒゲ先生)「まあ、聞きなさい」

【初収】(アカヒゲ先生)「まあ、聞いて呉ろ」(七八七頁)

③、題材の変化

【初出】そしてあるいは事件の出発点いつそのこと昭和四十八年末の石油危機と定めても差し支えない。石油こそ、この事件の火勢に油を注ぎ、やがていつそう派手に燃えあがらせた真犯人の一人だったからである。

【初収】そしてあるいは事件の出発点いつそのこと昭和四十八年末の石油危機と定めても差し支えない。石油こそ、この事件の火勢に油を注ぎ、やがていつそう派手に燃えあがらせた真犯人の一人だったからである。

いつそのこと、思い切つてセンチシヨナルにあの埼玉県

所沢市の富士見産婦人科病院の乱診乱療事件から始めようか。この事件の首謀者たちの願いのひとつは日本国に蔓延しつつあると思われるこの手の乱診乱療を、ある地域内から完全に駆逐することにあつた。だから富士見病院事件から説き起こしても、どこにも無理はない。(八頁)

初出から初収の八年間を経て、主人公古橋健二の年齢は「四十六歳」から「五十歳」へと変化し、小説という虚構の世界に生きる人物にもかかわらず現実世界と同じく年をとっている。そして、元々日本人で標準語を話す医師のアカヒゲ先生が、八年後吉里吉里語を使うのは吉里吉里国に長期滞在していたため吉里吉里語に馴染んでいた証である。さらに、初収で一九八〇年に起きた富士見産婦人科病院の乱診乱療事件が付け加えられ、初収では現実世界の規則、あるいは出来事が次々と取り入れられていることがわかる。これを「書き起こし」ているのはまさに語り手の「記録係」であり、菅野昭正が指摘する「昔と今」、「土俗と現代」(「ことばの魔術師 井上ひさし」岩波書店・二〇一三年四月)という異なる時空を生きていたからこそ可能になったことである。そこでまず作品における「記録係」の考察からはじめてゆきたい。

2. 「二つ」がもたらす〈二重性〉

2. 1 「記録係」と古橋健二

この、奇妙な、しかし考えようによってはこの上もなく真面目な、だが照明の当て具合ひとつでは信じられないほど滑稽な、また見方を変えれば呆気ないぐらい他愛のない、それ

でいて心ある人々にはすこぶる含蓄に富んだ、その半面この国の権力を握るお偉方やその取巻き連中には無性に腹立たしい、一方常に材料不足を託つテレビや新聞や週刊誌にとってははなはだお誂え向きの、したがって高みの見物席の弥次馬諸公にははらはらどきどきわくわくの、にもかかわらず法律学者や言語学者にはいららくよくよストレスノイローゼの原因になったこの事件を語り起こすにあたって、いったいどこから書き始めたらいのかと、記録係はだいたい迷い、かなり頭を痛め、ない智慧をずいぶん絞った。(七頁)

冒頭部から「記録係」は姿を表す。この吉里吉里分離独立運動を語る者として、「記録係」は事件を「いつたいどこから書き始めたらいのか」と迷う。この事件を様々な面から書き始められるという多様性を伝えつつ、「迷い」や「頭を痛め」から「記録係」が慎重に事件を語ろうとすることがわかる。そして、事件を「書き起こす」際に、頻繁に自分の義務や役割を強調する。「厳正」、「忠実」、「正確」、「事実」、「真実」などの同義語を並べながら事件に対して客観的に記述していることを示している。それは、たとえ記述前後の数字が一致しなくても、描写に違和感が生じたとしても、さらに「うんざり」していても、「記録係」はただその時その場の様子を記録したにすぎないということを表している。

記録係の役目は「古橋健二」という五流作家の肩越しに、次々と生起する事件をしつかり視ること)、これに尽きる。

当然、現実には手出しはできない。しかし、ブームマイクの正体が手榴弾だと察しがついていけば、それなりの表現もあつたらうと考える。記録係は、この点について、読者に詫びたいと思うウンヌンと愚図愚図いうのもまた記録係の任務ではない。(七七四頁)

〔一時間当り七十五枚、したがって三時間弱では二百余枚〕という物語密度に忠実であろうとすれば、以下二百枚以上、原稿用紙を★で埋めればいいわけで記録係としてはこんな楽なことはない。だが、エネルギー節約が喧伝されているこの時代にそんなことをしたら、お叱りに蒙ることは必定であろう。そこで〔一行あき〕ですませたのだった。だがやはり〔一行あき〕という安直な方法は記録係としての良心が許さない。ここはせめて次の如きやり方で古橋の心象を記録すべきであろう。(四八二頁)

「記録係」は「古橋の肩越しに事件を手出しせずに語る」という規則を作り、古橋の見たこと、考えたことしか書けないことを定め、「手出ししていない事実」を語っていることを証明していた。それを極限にまで示していたのが、古橋の度々の失神を「記録係」は書き起こしていたのだ。さらに一回目の失神で三時間（物語全体の1/12を占める時間）気を失うが、「記録係」はこの時間を全て記号で埋め、「一行あき」で省略することですら「良心が許さな」かった。これらによって古橋の失神している間は何も起こらない。というよりも、古橋を肩越しに見ているため、

古橋の見ていないものは「記録係」にも見えない。また、夕へ湊総婦長の声を何回聞いても聞き取れなかったのは古橋だけにもかかわらず、「記録係」は聞き取れなかった部分をあえて「……」で示す。ここからも「記録係」の忠実性がみられ、古橋の見ていないものだけでなく、聞こえていないものも決して書き起こさない。前田愛が「吉里吉里人」論（『解釈と教材の研究』一九八二年三月）で指摘するように、物語では「古橋＝狂言回し」という関係が築き上げられたてきた。しかし、この関係は後に「記録係」自らによって破壊されることになる。

記録係の役目はこの分離独立運動を常に古橋健二という人物の肩越しに見て、私心を交えずに一部始終を書き留めることにある。したがってここでお先き走りをして、

「古橋は、黒板の最後の二行半を読み損ったことにもっと拘泥すべきであった」

と記せば明らかにやり過ぎだろう。しかしやり過ぎと批判されようと、出しゃばりめと悪口を叩かれようと、記録係は言わねばならぬ。古橋が最後の二行半を読み損ったせいで吉里吉里国の、日本国からの分離独立運動は突然、方向を変えてしまった、と。「小さいことにこだわるのはよそう」という小悟が、間もなく吉里吉里人たちを非常に苦しい、辛いところへ追い込むことになる。では、古橋の読み損った二行半とはどういう文章だったのだろうか。これまた重大な規則違反であるが、ここに書き記しておく。こうである。(八〇二頁)

ここで「古橋の読み損なつた」部分を「記録係」は見えていて、さらに「書き記す」ことで古橋の見えていないものは語らないという規則に逆らうことになる。「記録係は言わねばならぬ」を理由として、今まで「記録係」が繰り返し強調してきた「忠実性」が自らの手によって破壊され、「忠実ではない記録係」が現れる。「分離独立運動」を語る同一の人物でありながら、「記録係」には真逆な二つの性質があり、「忠実性」をもって物語を語っていると同時に、この「忠実性」を打ち破る「記録係」も存在していた。次に、「記録係」が執着していた古橋健二に注目してみたい。古橋健二は五十歳の三文小説家、黄金が隠されている洞窟を巡る旅に出たはずだったが、やがて吉里吉里国の「分離独立運動」に巻き込まれ、犯人扱いされる。

ソーセージの皮を剥いていると、鼻黒と鼻白が激しく首を振りながら近づいてきた。(鼻黒は鼻白を、鼻白は鼻黒を、たがいに自分の尻尾と思つて振っているのだろうか) つまらぬことを思案しつつ、ポイポイと二本投げ与える。(中略) バリバリバリという気味悪い音を立てながら胴体が中央から引き千切れて行つたのだ。(二五二頁)

「被告は、先にイッタカキタカ号は二つに打つ、打つ裂いだ。んでまだ只今は、国有財産の下駄は二つに打つ裂いだ。つまり、被告は、何が言うど物は二つに打つ裂いで仕舞う癖が有るのであんまいか」(二二〇頁)

双頭犬の「イッタカキタカ号」をみた古橋健二は二本のソーセージをそれぞれ違う方向へ投げる。これによって「イッタカキタカ号」の胴体は二つに割れてしまい、「動物虐待」を理由に古橋は逮捕される。そして、吉里吉里人が語るように、古橋はとにかく一つのものを二つに割る癖があり、「イッタカキタカ号」だけでなく、国有財産の下駄をも二つに割ってしまう。一方、古橋には二つあるいは多数のものを一つに結びつけることもできた。日本語(標準語)で書いた受賞作が「吉里吉里文学」として扱われることから、対立の「日本国」と「吉里吉里国」が古橋健二によって繋がったこと考えられる。また、「五流作家」「文学賞受賞者」「国賓」「犯罪者」など様々な矛盾するような肩書きを同時に有していたことからわかる。そもそも、「古橋健二」という名前がすでに彼のこのような性質を裏付けているかのようには、二つを一つに繋げる「橋」と一つを二つに分裂させる「二」、これが吉里吉里国に入籍しても「ケンジ古橋」ではなく「古橋健二」と表記された理由は正にここにあるだろう。そして古橋が物語の最初から最後まで関わっていると同じく、彼のもつた性質も始終働きかけることになる。

次に、古橋健二と彼の肩越しに事件を書き起こしている「記録係」はどのような関係なのかを考察してゆきたい。

この男は恐ろしく筆が遅い。文学賞を受けた当座は仕事に殺到し、この男も自分の才能がそんなに底の浅いものであるとは気づいていなかった。来る注文舞い込む依頼すべて

引き受けたが、一日中机にへばりついていても四枚以上はど
うしてもかけない。(一二頁)

古橋の観察力や洞察力がいかにかに当てにならないか、読者諸
賢はその実例をこれまでいやというほどみてこられたはずで
ある。記録係のしゃしゃり出る幕ではないが、古橋の直感力
はあまり信用なさらぬようにひとこと小声の注釈をつけてお
く。(二九一頁)

「記録係」からみれば、古橋健二は非常に「当てにならない」
人物であつた。審査員の過ちから文学賞を受賞することになるが、
それを自分の「才能」によるものと勘違いし、「筆が遅くても
依頼は全て「引き受ける」が、「文学史上最劣等の作家」であ
ることには変わりないと「記録係」に皮肉される。そして、作家
として「記憶函」というものはあるものの、「中身を強化」した
り、「整理」もせず、「乱雑」に扱っていた。これに加え、古橋の
「心臓」さえ「宿主そっくりの怠け者である」と「記録係」は語
る。ここには「怠け者」の古橋を嫌悪する「記録係」がみられ、
とにかく古橋を描写するたびに彼を否定する。ところが、「記録
係」の主人公選びの過程を振り返つてみたい。

後ろから四輻目のグリーン車の12Aの席で、若い母親に抱
かれて眠っていた生後六ヶ月の赤ん坊がこの揺れで肘掛けに
頭をぶつつけぐずりだし、そのぐずり声で隣席12Bの男が浅
い眠りから目覚めたのである。つまりこの運命的な朝、六時

前に『十和田3号』の乗客で目を覚ましたのは、成人ではこ
の男だけだった。ほかは全員眠り続けている。この男を主役
にする以外はないだろう。(一〇頁)

『十和田3号』の乗客である「男四百三十九、女三百六十四、
性別不明五、合わせて八百八名」は「みなひとしくこの事件の主
役」になれるはずだった。しかし、この後の二ページもしないと
ころで、「記録係」は古橋健二以外の全員が眠っていることを理
由に、「この男を主役にする以外はないだろう」と記したが、一
見して偶然性に溢れた主人公選びに実は必然性があつた。主人公
の候補としてあげられた乗客は、「いまこんな夢をみているらし
い」しか書けることができないため「つまらない」、そして、機
関士については「ダイヤグラムと平行線ばかり」で「これまたつ
まらない」。車掌は「切符の金額とポケットの現金があつている
か」しか心配していないため「ましな物」が書けない。つまり、
主人公に選ばれる者は必ずその人を記録することで「ましな物」
ができ、「つまらない」くもないということを条件とする人でなけ
ればならない。ここで古橋健二が主人公に選ばれることは、古橋
が他の者とは違つて、彼を記録すれば「ましなもの」が書けて、
「つまらない」くもなくなるからだ。古橋健二の「健忘性記憶障害」
に關しての過去は第五章と第六章にわたつて語られている。彼が
尋常ではない人生を歩んできたからこそ「記録係」は二章にもわ
たつて「ましなもの」を書けたと言える。そして、「記録係」は
「怠け者」である古橋健二に嫌悪感を抱きながら否定する一方、
彼こそが最も主人公にふさわしい存在であると肯定していること

がうかがえる。

このように、「記録係」と古橋健二のそれぞれのありようと互いの関係について考察してきた。「記録係」は古橋健二の肩越しに世界を眺めるが、「古橋の見ていないものは語らない」という原則をもちつつ、ときには「忠実性」から逸脱するような性質を持っている。古橋健二も「二つ」を割る性質を持っていれば、それを一つに繋げることも可能であり、両者はそれぞれ〈二重性〉を持つていた。また、始終古橋健二を「怠け者」だと否定する「記録係」もいれば、古橋健二こそが主人公であるべき必然性を評価する「記録係」も同時に働きかけ、真逆の二つが有機的に絡み合う〈二重性〉がみられる。

2. 2 『吉里吉里語四時間』に学ぶ吉里吉里語

本節では、吉里吉里国の分離独立を支える切り札の一つの「吉里吉里語」を取り上げ、ルビと表記という「二つ」の要素で成り立っている「吉里吉里語」がこの分離独立運動においてどのような役割を果たしているのか、また、これによっていかなる世界が築き上げられてきたのかを考察する。

吉里吉里国の小学校では独立する一年前から、国際法・護身術・吉里吉里史・吉里吉里語が教えられてきた。公式の教科書として扱われる『吉里吉里語四時間』の前身はそれぞれ「一時間目は理論を学ぼう」、「二時間目は音韻について学ぼう」、「三時間目は文法について学ぼう」と、古橋が読み終わっていないかった四時間目がある。ここでまず二時間目の音韻練習の答えを取り上げてみよ

う。

①は、たとえば、

あぐやく〔aisatu〕→えーく〔3sazū〕

高ぐ〔tacai〕→たけー〔tacɔː〕

大根〔daicon〕→じーこん〔dɔːcon〕

早ぐ〔hayai〕→はやえー〔hajɔː〕

となるということです。(七一頁)

ここで吉里吉里国で使われる漢字は外国語とみなされる日本語と全く同じだということをまず確認しておきたい。というのは、『吉里吉里語四時間』では吉里吉里語について「わたしたちの吉里吉里国が日本国から分離独立する前までは、吉里吉里語はいわゆる〈方言〉のうちのひとつでした。もっといえばズーズー弁のうちのひとつでありました。」と紹介されている。このような方は標準語との発音は異なるが、漢字表記は一致している。例えば、「高い」という漢字表記に対し、吉里吉里語では「たけー」と発音するが、そもそも漢字に表すと全く日本語と変わらない。そして、「たけー」という発音は「竹」や「武」などの漢字表記に変換することも可能であるため、「たけー」という発音は必ずしも「高い」という表記と一対一の関係でマッチングしているとは限らない。これは他の答えにも同じことが言える。そして、このような関係を裏付けているかのように、『吉里吉里語四時間』にはこのような練習問題もあった。

イ 「木々」と「釘」は吉里吉里語でどう発音しますか。
(中略)

ハ 「靴」と「口」はどう発音しますか。
(六七ページ)

吉里吉里語では、「クグ」を「木々」と表記することもできれば、「釘」として表記するのも間違いはない。そして、「クウズイ」を「靴」や「口」、さらに多くの表記に書き換えることができるかもしれない。では、吉里吉里語は何を可能にしたのか。「靴」を例にすると、吉里吉里語は「靴」≡「クウズイ」という関係をつくり上げてきたが、「靴」も「クウズイ」もそれぞれ独立した意味合いとして働かせることができる。なぜなら、「靴」には「くつ」という発音もあり、「クウズイ」には「口」というもうひとつの表記があるからだ。吉里吉里語はまさに一対一の関係を打ち破って二重の関係を築き上げ、教科書『吉里吉里語四時間』を通してこの二重関係を正当化していた。

いったいどこから書き始めたらいのかと、記録係はだいぶ迷い、かなり頭を痛め、ない智慧をずいぶん絞った。(七頁)

「古橋被告、裁判ば続けべい」(二九六頁)

「殺しの中では完璧な間合いで引き金を引く人がベッドの上ではどうしてああ焦るのかしら」(五八九頁)

また、『吉里吉里語四時間』の記述だけでなく、「記録係」によつ

て書き起こされた文にも同じことが言える。「記録係」の読み方が「きろくがかり」であるにもかかわらず、ここでは「わたし」というルビがふられている。同じく、「被告」に「へこく」、「完璧な間合い」に「パーフェクト・タイミング」のようになっていく。表記は全て日本語(標準語)で書かれているが、ルビは「わたし」のような標準語もあれば、「へこく」のような方言もあり、さらに「パーフェクト・タイミング」のような英語からきた外来語もある。読者としては、上記の言葉を表記通り読むこともできれば、ルビの方で読むことも可能であり、この二つの可能性によって新たな言葉が支えられていると言える。前田愛の「吉里吉里人論」(前同)で、「吉里吉里人」のテキストによって作り出された世界は「カーニバル性などの特性をそなえた豊饒な言葉の世界であった」と述べられているように、たしかに、多様なテキストが混ざり合っていることには間違いがない。しかし、これらによって作り上げられた世界は主体の消えた「カーニバル」の世界というよりも、新たな主体を作り出す「二重の世界」だと言った方がよいだろう。「記録係」に「わたし」というルビをふることで、二つの意味を持つ新たな単語が生まれる。

以上述べてきたように、この物語の語り手である「記録係」、主人公の古橋健二にはそれぞれ「二重性」があると同時に、両者の関係にも「二重性」がみられることがわかった。このほかにも、双頭犬の「イッタカキタカ号」、犬と猫を合体させた「ニヤワン」、タヌキとトマトを合体させた「トヌキ」、牛の背中に米が成る「牛米」、ネズミと胡瓜の「ネズキュー」、象と金魚の「ゾウキン」など様々な「二つ」が絡み合って吉里吉里国では当たり前のように

存在している。また、独立を支える切り札の一つである「吉里吉里語」も、表記とルビとがそれぞれ働きかけるなかで、新たな言葉が生まれてくるという〈二重性〉をもっていた。つまり、多様なものを集約した吉里吉里国は、あらゆるものが真逆な「二つ」の性質を持って働きかけながらも、有機的に一つに絡み合っているという〈二重の世界〉であったのだ。

3、「無駄」から生じる意味

吉里吉里国ではあらゆるものが〈二重性〉を持ち、真逆の二つが一つに絡み合っていることは既に前章で明らかになった。そして、これらの〈二重性〉を持つ多種多様なものが吉里吉里国に集約されることで多様性が重んじられていることが明らかになり、〈二重の世界〉吉里吉里国では単一性のものが存在する可能性は○に近いと言っても過言ではない。本章では、吉里吉里分離独立運動において数多く語られてきた「無駄」を問題化し、「無駄」が「無駄」ではなくなる過程を通して、「無駄」から生じる意味を考察する。

3. 1 「無駄」の堆積

「そして三刻（六時間）ほどたつてからナントカは……」と、六時間の時の経過をわずかの二十字前後で語る技術があるというのに、なんとという無駄であろうか。これはほとんど犯罪に近い浪費であり、無駄使いであるが、こういっ

た書き方しか出来ないのだから仕方がない。（一三〇頁）

「（略）立つて書く」と文章に無駄がなくなるからなんだ。椅子に坐つて書くよりも辛いだろう。だから早く書いてしまおうとする。余計なこと、無駄なこと、どうでもいいようなこと、そんなもん、まだるっこしくて書いていられない。そこで大切なことだけを簡潔に書く癖がつく。いつか試してみたまえ」（三三四頁）

「いかん。われわれの座敷の電灯とテレビ、つけっぱなしにして出てきてしまった。エネルギー源の無駄使いだ。由々しきことだよ、ケイコ君。とくにこの吉里吉里国ではエネルギーの浪費は殺人に匹敵する大犯罪だと思う。独立をどこまで全うできるか、それはエネルギー源がどこまで保つてかにかかっている。そうじゃないかね」（四三二頁）

ここでまず「記録係」が「無駄使い」に触れる。時間の経過を示す方法に、「わずかの二十字前後で語る技術」があるにも関わらず、それを一々時間軸に従って書き起こす行為は「無駄」であるという。ここで示されている「無駄」は取捨選択を行わずに全て描き起こされた物語の中にある、「分離独立運動」と全く関係の無い部分であり、それは語り手にとつての書く時間の「浪費」でもあれば、語られる側（読者）にとつての読む時間の「浪費」でもある。そして、このような「浪費」は「犯罪」とほぼ変わらない。タモツ山田少年が古橋の文章を読んだあとに彼の文章の

「無駄」について語っている部分に注目してみれば、彼は古橋の小説を「全部無駄だといってもいいぐらい」出来が悪いと語っている。「余計なこと」「どうでもいいこと」「大切じゃないこと」と、タモツ山田は「無駄」の意味について明確に示していた。さらに、吉里吉里国では「エネルギーの浪費」、すなわち「無駄使い」は「大犯罪」であり、固く禁じられていたのだ。つまり、吉里吉里国における「無駄」とは、本質的な事柄とは掛け離れた「余計なこと」や「どうでもいいこと」が大量に産出される「犯罪に近い浪費」であることがわかる。

おのおのがみなどにも、おずおず、おどおど、おろおろ、がたがた、がちがち、がやがや、恐々兢々、くよくよ、ぐずぐず、けんけん、がくがく、こわごわ、ざわざわ、しおしお、しくしく、そわそわ、うろうろ、ちよろちよろ、びくびく、ぶつぶつ、といった有り様で、この、おずおず、おどおど、おろおろ、がたがた、がちがち、がやがや、恐々兢々、くよくよ、ぐずぐず、けんけん、がくがく、こわごわ、ざわざわ、しおしお、しくしく、そわそわ、うろうろ、ちよろちよろ、びくびく、ぶつぶつは、いまだに継続しているのである。(二二三頁)

二十四のひとみ

ひ、み、ひ、み、ひ、ひ、み、
ひ、ひ、ひ、み、み、み、み、
み、ひ、み、ひ、み、ひ、

み、み、み、ひ、ひ、ひ、
み、み、ひ、み、み、ひ、
ひ、ひ、み、ひ、ひ、み、
ひ、み、ひ、ひ、ひ、み、
み、ひ、み、み、ひ、み。

数えてごらん、ひとみの数を。

ひが二十四、みが二十四、
つまり、これが本当の二十四のひとみ。

文学するべくを穏やかにはげます、
バスのなかの二十四のひとみよ。

心あたたまる二十四のひとみよ。(六九四頁)

吉里吉里国が「無駄」に対してこだわりが高まる一方で、古橋はそれとは裏腹に、常に「無駄」を生み出していた。吉里吉里国に入国した第一号の日本人として、テレビ局や出版社からの原稿依頼が殺到する中、出来上がったものは「無駄」の大量の積み重ねだった。「おずおず」、「おどおど」などの二十の畳語が二回も繰り返され、もともと「分離独立運動」の進展を一刻も早く伝えてほしいということで依頼された原稿が、古橋は四十もの畳語を使って「どうでもいい」言葉を大量に羅列して何一つ「分離独立運動」については語っていない。また、「第一回おたねパッパ童話受賞作第一作」の「二十四のひとみ」はさらに驚くほどの「無駄」の堆積からなっていた。二十四の「ひとみ」は二十四の「ひ」と「み」からなっていて、古橋は「ひとみ」を二つに分裂させて「心あたたまる二十四のひとみ」と書いていたのだ。そして古橋

の「二重性」が働きかけたせいか、彼の見たもの、考えたものがやがて「ひとみ」のような「二重性」のあるものを生み出した。それにしても二十四の「ひ」と「み」の羅列は「余計なこと」や「どうでもいいこと」をはるかに超えたそもそも「意味のない」ものの堆積でしかなく、これを一々書き起していることも原稿用紙の「無駄」でしかない。しかし、「そこは商売、これぐらいの反対語は常に脳中に貯えられているのだ。」と古橋が言うように、大量の言葉を常に貯蔵することは小説家にとって「商売」であり、それが多ければ多いほど原稿料になるのだ。

一枚が五千円なら六十枚では三十万円である。税金を一割差し引かれても一万円札で二十七枚。二十七枚の一万円札を繋いだらどれだけ長くなるだろう。万里の長城ぐらいあるかしらん。たしか一万円札は横の長さが十七糎強、二十七枚では、エートエート、四米五十九糎……、(略)(二二頁)

もつとも月取十万未満の生活とはもうおさらばである。独立第一日のこの吉里吉里国に偶然足を踏み入れたのが運のつきはじめ、『旅と歴史』の編集長からは電話で「一枚五千円に値上げします」という申し出があったし、あの朝日新聞には三枚のエッセイを電話で送稿してある。これからは稿料の高い仕事がどんどん押し寄せてくるだろう。このチャンスを生かすためにも、裁判に勝たねばならぬ。(二九八頁)

「才能乏しき三文小説家」古橋は「無駄」を続々と産出する一方、自分の原稿料は非常に細かく計算していた。日本国からの「一枚五千円」という原稿の依頼を聞いたとたん、その枚数を直ちに金額に換算し、次から次へと妄想していく。そして、吉里吉里国から賞金として「原稿用紙三枚」に「一億円」受け取ることに対して、「一字につきお金が八万三千三百三円」と細かく且つ素早く金額の計算をして喜ぶ。古橋の場合、「無駄」の堆積は「商売」であり、そこから原稿料、すなわち「お金」を受け取ることができる。つまり、「一見「余計なこと」や「どうでもいいこと」でも、それが大量に積み重ねられることで「お金」といった価値あるものになっていく。

3. 2 「イエンの交換原理

「無駄」の堆積がただの「無駄」ではなくなり、「お金」になっていくのであれば、この「お金」はいかにしてその価値を出しているのか。本節では吉里吉里国の流通貨幣である「イエン」について、分離独立運動を支えながら世界にも大きく影響を及ぼしているその価値に迫る。

「吉里吉里の紙幣は兌換銀行券だべす。紙幣の持ち主はその気になったら、いつでも、吉里吉里銀行で金と、つまり本位貨幣と引き換えつ事ができんのっしや」(二三三頁)

「吉里吉里イエンに値打があるのは当たり前。吉里吉里イエン、イコール金なのだから、だれだって吉里吉里イエンを欲しがるさ。特に産油国などは吉里吉里イエンに目の色を変えているにちがいないぞ。」(六五七頁)

「吉里吉里イエン」は世界で唯一の兌換銀行券であり、吉里吉里国が独立を宣言する重要な切り札の一つだった。そこから多国籍企業のほとんどが次から次へと吉里吉里国に殺到し、支社を設けていき、「吉里吉里イエン」と日本円の交換レートもこれによって大幅に変化していく。吉里吉里国では「イエン」の流通が盛んであるのはまさに「イエン」が「金」と交換できるからだったのだ。

簡単に言うと、十二時間働いた人間は、十二時間働いたという証拠に、十二時間分の労働貨幣をもらうことであると、階段を一階フロアに向かって降りながらトシコ村瀬は講釈してくれた。そして、その十二時間分の労働貨幣で、十二時間分の労働が投下された商品が買える。(中略) この労働銭シコは買物には使えない。吉里吉里国立銀行(吉里吉里国立郵便局内にある)をはじめ、国内の要所に設けられている国立銀行出張所で吉里吉里イエン貨と交換するのだそうである。交換レートは、「一時間労働銭シコ〓三千イエン」だという。(五三三頁――)

労働銭シコ制は吉里吉里国立病院に取り組まれた報酬制度であ

る。人々は労働することによって、その労働時間を示す「労働貨幣」を取得できる。そして、労働貨幣を国立銀行出張所で吉里吉里イエン貨と「一時間労働銭シコ〓三千イエン」のレートで交換する。しかし、このような「交換」は基本理念であり、具体的には細則もあり、仕事の経験やそれに対する学問知識の有無、仕事の結果など様々なものを勘定に入れて最終的な労働報酬が決められる「吉里吉里式精密平等労働銭シコ制」が編み出されていたのだ。吉里吉里国では、皆平等に労働報酬がもらえるため厳密な工夫が行われていた。労働によってそれにふさわしい労働貨幣を獲得し、その労働貨幣がまた「イエン」へと交換でき、「平等的な格差」のもとで、働けば働くほど「イエン」を手に入れられる。逆に「イエン」を払えばその価値相当の労働を買い取れるということになる。

「芸者の売春。そんなものは旧時代の遺物ではないか。この吉里吉里国がそんな古い尻尾を引き摺っているとはとても思えぬ。それに吉里吉里国の人口は約四千二百人。千六百五十床の大病院があり、税関や密入国者收容所があり、国際水上空港があり、そして食糧自給率一〇〇パーセントを確保するために農業にも大勢の人数をさかなくてはならない。つまりこの国は猫の手も借りたいほど忙しいのだ。人口の一パーセント以上を芸者にしてほうっておくだけの余裕はあるものか。日本国でたとえてみれば、百万以上の芸者衆……。とてもそんな。たぶんここいらは連れ込み旅館街なのだろう」(三二六頁)

「今度の話は直ぐ済むっちゃ。これ、『ワン・ナイト・スタンド・カード』づものでな、空欄を記入して互いに交換する。相方ば理解する一助と為る訳よ」(四一三頁)

さきに述べたように、「イエン」は金とだけでなく、労働とも交換できる。そのほか、吉里吉里国では「イエン」と性との交換、いわば売春も行われていた。ここで古橋が目にしたのは吉里吉里国で有名な売春の場——女紅湯での光景だった。そこには、医者、の岳先生と芸者のハナエ林田が「ワンナイト」を約束した「イエン」と性との交換が行われていた。しかも、芸者との「ワンナイト」を楽しむにはたった一つだけの条件が必要であった。それが「イエン」である。「イエン」を持っていなかった古橋は「交換」ができなかったのだ。逆に、「イエン」さえ持っていれば、年齢や国籍を問わずに芸者遊びができる。芸者側も「恥ずかしがらず」に売春を「イエン」を求める手段として使いこなしているだけなのだ。また、吉里吉里国人口の一パーセント以上が芸者であることから、吉里吉里国では売春業が盛んに行われていることがわかる。

このように、「無駄」なものが大量に堆積すると「お金」になり、吉里吉里国では「イエン」という形で存在することがわかった。そして、「イエン」はドルや円などの外貨と交換することもできれば、労働力とも交換でき、最終的には国に認められた売春、すなわち「性」と交換することも可能であった。つまり、「無駄」が堆積すればするほどただの「余計なこと」や「どうでもいいこと」ではなくなり、一定の価値あるものに転換される。

4、国家からの離脱

日本国から分離独立し、吉里吉里国は様々な面で革新を試みて日本国との違いを主張していた。その最も著しい一面として、売春の正当化など〈性〉を積極的に取り入れていくことに注目している。本章では、吉里吉里国における〈性〉のありようを確認してから、国家の消滅に伴って生み出された「地の霊」を問題化し、吉里吉里分離独立運動が繰り返される中で、無数に増殖していく「地の霊」が訴える〈国家像〉を明らかにする。

4. 1 国家と〈性〉

「では、一人前の大人とはなにか。『国外移住法』の第三条は以下の如く規定しておるぞ。『本法で一人前の大人言うなア、女子ですでに月経ば見だ者、男子であれば、若い女子の乳房ば見で、三分以内に珍宝ばムクムクムクラて勃起させだ者の事でがんす』……」(三三四頁)

(前略) この国の若者のなかには婚約者を妊娠させたが、相手の娘さんがまだ赤ちゃんを生みたくないというので、焼火箸と靴べらで搔爬に成功したものもいる。(中略) そこで彼女は鏡の前に竹下景子の写真をたてかけ、それを見ながら、カッターと三脚定規と分度器と針と糸、それからセメダインCとアイロンを使って、自分で自分の顔を整形

してしまった。(略)(六二六頁)

吉里吉里人が自ら「好色人種」と名乗るように、吉里吉里国では誰もが〈性〉を好み、そして〈性〉について時間や場所を問わずに語ることができた。それを裏付けているかののように、国歌、法律、文化など国家レベルにおいて〈性〉が正当化されていた。

国歌の歌詞に「性器」が書かれたり、法律の定める「大人」は年齢によってではなく、「女子ですでに月経が見た者、男子であれば、若い女子の乳房が見て、三分以内に珍宝ばムクムクムクラテ勃起させだ者」で、「文化財」に「性器」が選ばれ、会話で「乳首」や「早漏」などがでてくるように、国歌、法律、文化、日常会話など様々の面に及んでいる。また、子供を産みたくなければ「焼火箸と靴べらで搔爬」もできれば、「自分で自分の顔を整形」することもでき、やがて独立を支える大きな切り札の臓器移植手術につながる。このように、吉里吉里国ではいたるところにまで〈性〉が染み込んでいて、それは〈性〉を自由に語ることだけではなく、自らの手で改造することも可能である〈性〉のユートピアであった。つまり、吉里吉里国の独立を根本から支えていたのは〈性〉であり、〈性〉によって吉里吉里国が生成したといえる。

〈性〉を改造するにあたり、吉里吉里人はあらゆるものを合体するのに力を入れていた。やがてこれが植物や動物にとどまらず、人間の臓器移植にまで及ぶ。これが予言されているかのようには、古橋は沼袋老人の語る「脳と身体がくっつくかもしれない」と聞いた途端、「わしの首から下の部分が駄目になって、丈夫な脳だけが若い女性の身体の上に乗ったとしたらどうなるかしらん」

(276頁)とニヤニヤしながら想像する場面がある。やがてこれが現実になり、古橋の脳がベルゴ・セプンティーンの体に移植されることになる。

考え込むに連れて、古橋分がパーセント、五パーセント、七パーセントとふえ、ふえた分だけ身体の動きがぎこちなくなってくる。(踊っている間は邪念は禁物だぞ。タヘ湊総看護婦長の言っていた事など、気にしないことしよう)(八一頁)

男は答えるかわりに拳銃を二発、射った。最初の一発はベルゴ・セプンティーンの心臓を貫いた。同時に古橋の脳も考えるのをやめた。二発目は逸れて古橋の背後にいた記録係に命中した。(八三二頁)

移植手術は完成したものの、古橋の「脳味噌」は完全にベルゴ・セプンティーンの「体」に「着床」しておらず、一つに合成された新たな生命体には古橋とベルゴ・セプンティーンが同時に働きかけていたのだ。古橋は自分の寄宿している体(ベルゴ・セプンティーンの体)が「自分のものではない」という違和感を抱き、その新たな体は「古橋分」と「ベルゴセプンティーン分」の割合によって支配されている。古橋とベルゴ・セプンティーンを合体した新たな生命体は物理上一体としてまとまったが、「古橋の脳」と「ベルゴ・セプンティーンの体」とで個々に存在し、二つのパーツとして働きかけていた。しかし、最終的にこの生命体は拳銃

に打たれるが、命中したのは「ベルゴ・セプンティーンの心臓」であったのにもかかわらず、同時に古橋の脳も考えるのをやめることで「脳味噌」が「体」に着床し、古橋とベルゴセプンティーンが一つになったことがわかる。「記録係」が「あの男さえ吉里吉里を通りかからなかつたら……」と嘆くように、古橋が吉里吉里国を消滅へと導かせた人物であることは確定できる。すでに触れたように、古橋とベルゴ・セプンティーンの合体は吉里吉里国の〈性〉の自由を極端にまで押し上げた結果であり、〈性〉の象徴であった。この〈性〉の象徴が消えることで吉里吉里国の「分離独立運動」は幕を閉じ、吉里吉里国は〈性〉によって消滅することになる。

ところが、吉里吉里国の生成と消滅を同時に可能にさせる〈性〉は、国歌や法律、文化をはじめ、移植手術まで全部が男女を区別した上で成り立っていることをさきに確認しておきたい。つまり、男と女がいるからこそ〈性〉が意味を持つようになる。しかし、国家の生成と消滅という真逆な「二つ」が〈性〉をもとに働かされるように、〈性〉の意味も国家の生成と消滅が無限に繰り返される中で更新されつつある。そして、吉里吉里国が消滅するたびに「地の霊」が生み出されるが、これが男女を区別させない存在として、〈性〉に新たな意味を与えていることになる。

4. 2 「地の霊」と化した「キリキリ善兵衛」

まんづまんづ其様なわけだから、
自給の思想で武装して、

俺達の地面ば耕し尽すべはア、

したれば、こつたな素敵な商売は無いら。

米だけで無く、小麦だの大麦だの、

大豆だの、小豆だの、胡麻だの、

なんだのかんだのて百の作物ば作つて。

百の作物が稔れば、世の中どうなつても、

俺達だけは飢える心配は無いら。

百姓は百の作物ば作る、それだからこそ、

んだ、百ショーほど素敵な商売は無いら。(四三〇頁)

「そうではない。ひと握りの土にも先人の血と汗と涙とがたつぷりと染み込んでいて、つまり歴史が籠っていて、それがために重いつてことさ。あらゆる時代に、そしてあらゆる土地に、何千、何万の吉里吉里善兵衛がいたのだ。それらの善兵衛たちは、一坪の田を殖すために、笠の下に隠れるぐらいに狭い荒地を畑にするために命を賭けた。田畑の土はそういう善兵衛たちの努力のおかげで、少しずつ質の良いものになつてきた……」(四四〇頁——)

「地の霊」は吉里吉里を守る「キリキリ善兵衛」の死後の「たましい」だった。そして、吉里吉里分離独立運動を書き起こしている語り手「記録係」も「キリキリ善兵衛」の一人であり、その正体は、第十三章の「吉里吉里甚句」で語られていた。キリキリ善兵衛は、御上におさめるべき年貢米を一時、流用し、吉里吉里村に灌漑用の水路を引く普請を成し遂げたが、ついに咎めを受け

て咽喉を突いて自害した男であった。そして死後は吉里吉里の「地の霊」と化して留まり、その地に起こる飢饉や一揆といった歴史を眺めてきた。この「初代キリキリ善兵衛」の努力のおかげで、百姓たちは「自給自足」を成し遂げ、「素敵な商売」を見出すことができた。今回の「分離独立運動」もこの村を愛する何千人ものキリキリ善兵衛が起こし、国が消滅すると共に、彼らも「地の霊」となってこの村に止まり続け、この「自給自足」の土地に「歴史」が深くこもっていたことがわかる。

記録係は……いや、もう記録すべきことは何もない、だからこれからはただのたましいに戻ることにしよう。わたしはそのまま上昇して天井を通り抜けて三階の病室へ出た。そこは四人病室であるが、四台のベッドにはいずれも額に赤黒い穴をあけられた死者が横たわっていた。さらにわたしは壁を抜けて外へ泳ぎ出た。病室の中庭には銃声と絶叫とがかわるがわるこだましていた。(八三二頁)

「ただのたましい」に戻った「記録係」は、その後の書き起こしにおいて、「記録係」という漢字を捨て、ただの「わたし」となって記述を続ける。もともと「記録係」と「わたし」の二つが有機的に絡み合って語り手の「記録係」を築き上げているはずだが、吉里吉里国の消滅とともに、最終的には「わたし」が宿る身体「記録係」を切り捨てる形で、「わたし」という「たましい」だけが残ることになる。これと同じように、村のために身を張った「吉里吉里善兵衛」は自害した後に、「キリキリ善兵衛」へと、

ルビが宿る「身体」の部分が切り捨てられて、「たましい」の分の表記しか残されていない。つまり、「地の霊」は身体に拘束されず、身体の限界を超えている。そして「地の霊」は身体を捨てることで初めて自由に「天井を通り抜け」、「壁を抜けて外へ泳ぎ出し」、空間にとらわれず存在してゆき、身体の限界というものを打ち壊し、身体にとらわれない「たましい」、すなわち身体など必要ではないということを裏付けていたのだ。

そして、このたびの一揆には「成る」可能性が十分にあったと思う。がしかしあの小説家が編集者にうかうかと乗せられて、金の隠し場所を言ってしまったことがこの「成る」可能性をあっけなく潰してしまった。(八三三頁)

まあいい。まあよからう。このキリキリ善兵衛はこれまで三百年も待ったのだ。待ちついでにこの先も待ちつづけるさ。百姓どもに朝が訪れるまで、百年でも二百年でも、地の霊となってここにとどまりつづけよう。どれ、新入りの地の霊たちのベそかき面でも見てくるとするかな。(八三四頁)

吉里吉里国は生成してわずか二日で消滅した。そこから何千人もの「キリキリ善兵衛」が誕生し、「地の霊」と化して止まり続ける。そもそも「分離独立運動」が順調に進み、最終的に国家として存在し続けるならば、「地の霊」は誕生しないはずだ。というのも、「地の霊」は吉里吉里村を守るがために身を張った「キ

リキリ善兵衛」の死後の「たましい」であり、小作争議や一揆で命を失ったもので、吉里吉里国にとっては「歴史」だったのだ。

しかもこの歴史は、「失敗の歴史」で、吉里吉里国の独立、すなわち「成功の歴史」にとつて「いらぬもの」、あるいは「余計なこと」といったような「無駄」にすぎなかった。「失敗の歴史」が多ければ多いほど独立の妨げとなる。一度国家が消滅しても、

「好色性」から吉里吉里人は再び国を作ることになる可能性はあるが、この度の「分離独立運動」で数多くの「地の霊」が生まれたように、再び起こされる「分離独立運動」は、失敗するたびにまた多くの「地の霊」が増殖し、「何千人」そして「何万人」へと堆積が繰り返される。しかし、第三章で述べたように、「無駄」の堆積は決して無意味ではない。「地の霊」の存在が身体の限界を越えながら、身体など必要ないということを示しているように、「地の霊」が無数に増殖することは、身体など必要ないとするものが堆積することを意味し、やがて〈国家〉など必要ないと告げているように、吉里吉里国は「成る」可能性のない国家だったのだ。ところが、小説の冒頭部で、「記録係」がどこから物語を語り始めるか迷う部分に注目したい。「天平二十一年の奈良東大寺大仏像頭」、「明治天皇降幸のもとに挙行された駒場農学校の開講日当日、すなわち明治十一年一月二十四日」、「昭和三十五年の農業近代化」、「六十年代前半アメリカの作家ヘミングウェイの弟弟であるレスタール・ヘミングウェイの独立宣言」、「昭和四十七年の田中角栄元首相の中国訪問」、「昭和四十八年末の石油危機」、「一九八〇年九月埼玉県所沢市の産婦人科病院乱診乱療事件」など、「記録係」がどの時代Ⅱ（事件）からこの物語を語り始めるか迷

うのは、まさにどの「歴史」においても、吉里吉里国の運命は変わらないという命題が暗示されているのではないだろうか。

5. おわりに

本稿は吉里吉里国における「二つ」と「一つ」、「無駄」と「イエン」、〈性〉と「地の霊」などの問題をめぐって『吉里吉里人』を考察した。日本国に愛想を尽かし、「分離独立運動」を通して自給自足の新国家を作り出そうとする吉里吉里国では、あらゆるものが〈二重性〉を持っていた。物語を書き起こす「記録係」や独立の切り札である吉里吉里語をはじめ、それぞれが真逆の「二つ」の要素からなっていて、この「二つ」が有機的に絡み合いながら働きかけることで新たなものが生みだされる。そして、〈性〉が吉里吉里国の「分離独立運動」の鍵となり、吉里吉里国の生成と消滅が有機的に絡み合う結果、男女の区別を前提にする〈性〉も、男女を区別させない、すなわち身体を持たない「地の霊」の誕生によって新たな意味を持つようになる。さらに、国家が消滅するたびに増殖する「地の霊」は、この「分離独立運動」にとつての「無駄」であるにもかかわらず、身体を持たずに堆積することと〈国家〉に囚われない、または〈国家〉からの離脱を表す。このように、〈二重性〉に満ちた世界の構築や貨幣と〈性〉への新たな認識、そして「地の霊」という「無駄」の堆積などが〈国家〉という面で絡み合いながら一つに集約される結果、吉里吉里国は「成る」可能性のない〈国家〉を意味していたのだ。